

# 失われた村を想い続ける六六年

井口 淳子  
大阪音楽大学教授

嘉手納町のある式典

嘉手納町と聞くと、誰もが「嘉手納基地」を思い起こすだろう。しかしあの広大な基地、灰色の巨大な滑走路の下に、かつて多くの集落が存在し、大綱引きやエイサー（旧盆に踊られる舞踊）などゆたかな民俗文化がはぐまされてきたことを想像できる本土の人は少ないのではないだろうか。嘉手納米軍基地の町となったのは、一九四五年四月一日、嘉手納の目前に米軍艦隊一三〇〇船があらわれ、艦砲射撃が一斉におこなわれたその日からである。

そして六六年が過ぎ、今年二〇一一年六月一九日、嘉手納町中央公民館で、ある記念式典が開かれた。「千原郷友会創立五〇周年式典・祝賀会」である。「郷友会」とは、文字どおり、故郷を同じくする人びとの親睦会であるが、千原村は、嘉手納基地のなかに消失し、戦後一度たりと村民は村落の土を踏むことがかなわなくなった「失われた村」なのだ。

千原のように基地に消えた村の郷友会は他にもいくつか存在するが、郷友会活動がここまで活発なところは少ないであろう。会費を集



50周年祝賀会でのエイサー

め、年に一、二度、集まるだけなら、新しい住まいのコミュニティへの帰属意識の方が強くなるのは自然ななりゆきである。

決して村を忘れない

さて、冒頭の式典・祝賀会は三時間におよぶ熱気のコモった会であった。伝統舞踊や武術、ウチナーグチ（沖縄方言）でのスピーチの最後をかざったのは、やはりエイサーであった。感きわまつた長老までもが舞台にあらがり踊りはじめたときには会場の熱気は最高潮に達し、わたしのそばにいた一人の婦人が「他村に嫁ぎましたが自分のふるさとが誇らしいです」とささやいた。

すぐそこにある故郷、しかし滑走路の下に沈んだ村の姿は一枚の航空写真に残されている。米軍が上陸直前に撮影したその写真は祝賀会のプログラムの裏表紙に使われていた。整然と耕された畑地が見てとれる。そこには

千原村とエイサー  
では、なぜ、千原の場合、郷友会が五〇年も続き、県内に散居する三〇〇世帯から二〇〇名もの旧村民とその子孫が集まる盛大な式典・祝賀会が開かれたのだろうか。じつは「千原村」は消失したものの、「千原」の名は今日なお全県にとどろいているのだ。沖縄の旧盆には「エイサー」という舞踊が先祖供養のために踊られる。もともと沖縄中部地域はエイサーがさかんであるが、千原のエイサーには、突出した特徴がある。男性のみで編成され、武術の型をとり入れた独特の舞踊様式をもち、しかも、変化することをいとわぬ現代沖縄のエイサーに対して、かたくななまに伝統にこだわり、先人の踊りの型を守ることが旨としていのである。千原は「屋取（ヤードゥイ）集落」とよばれる土族が地方の農村に移り住み形成した村であり、そのこともエイサーの様式や伝承意識に影響を与えていると考えられる。

写真にあるように、腰を深くおとし、踊り続けることは厳しい練習を必要とする。戦前は、村を決して忘れまいという強い意志と村民としての自負が込められている。

「東日本大震災」以降、福島原発避難地域の人びとが置かれている状況に深い共感を示し、いつになれば故郷に帰れるのかと、わがことのように悲嘆の感情を抱いている人は多いであろう。しかし、福島の状況は筆者に、嘉手納をはじめとする沖縄の米軍基地にもともと数多くの村落があり、今なお強い郷土愛をもち続けながら六六年間、帰村がかなわなかった人びとがいることを思い起こさせてならないのだ。

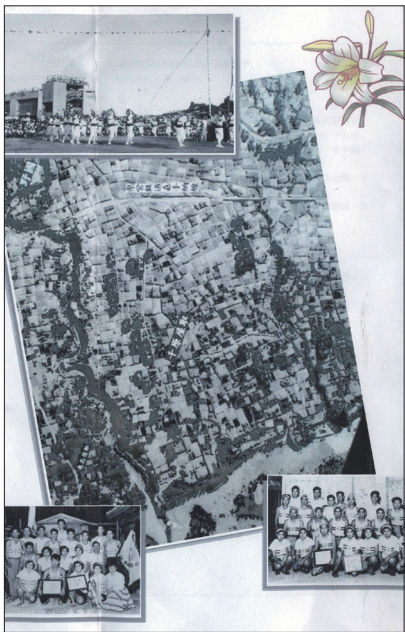
（嘉手納基地返還にこだわり続けた宮城篤実前町長に代わる町長選挙が二〇一一年一月におこなわれたが、候補者の公約は福祉、教育方面に重点がおかれ、基地返還が選挙の争点になることはなかった。）



基地内の仮の拝所（うがんじょ）での奉納エイサー



エイサー保存会会長と次世代をになう子どもたち



50周年式典・祝賀会のプログラム裏表紙（米軍が撮影した航空写真）